

令和8年度第1回
佐世保市総合計画審議会
会議要旨

【日 時】 令和8年5月19日（火） 13:30～15:00

【場 所】 佐世保市役所本庁舎5階 庁議室

会 次 第

1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 委嘱状交付（委員交代に伴うもの（2名））
4. 諮 問
5. 議 題
（1）次期総合計画策定について
6. 閉 会

○出席委員 15名
欠席委員 5名

【資料】

- ・資料1 次期総合計画策定について
- ・参考1 第7次総合計画について

会議要旨

1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 委嘱状交付（委員交代に伴うもの（2名））
4. 諮 問
5. 議 題
 - (1) 次期総合計画策定について

～事務局説明～

【委員】

今後、次期総合計画を策定するにあたり、本市における「人口の維持」を考えた場合、ターゲットはやはり20代になってくると思う。したがって、基本構想のイメージの中に「若者」というキーワードを入れるべきではないかと考えているが、市としてターゲット層をどのように明確に考えているのか伺いたい。

ターゲットをメインに据え、どこを重点的に取り組むのかが具体的に示されていた方が分かりやすいのではないかと。

例えば、子育てをメインにするのか。または、佐世保市は出生率が比較的高いものの、企業に就職した後に育休や出産で休業する際、企業側も大変であるという話を聞く。そうであれば、出産に対して市から企業へ補助をするなどの若者への手厚いサポートをするのか。

それらのように具体のターゲットがあると、イメージが明確になるのではないかと。また、そうした視点をビジョンやキーワードとして掲げることで、今後の政策の決定における方向性を定められるのではないかと。

【事務局】

委員ご指摘のとおり、佐世保市は若い世代の転出が課題となっており、先日も新聞等で報道されたところである。本市としても、そうした世代のターゲット化については、一定考慮しながら計画の中で論じていくべきだと考えている。

一方で、現時点では「こういう方針でいく」という確定的なものは決まっていない。委員の皆様のご意見を頂戴しながら、そうした要素をどの程度計画に織り

込んでいくのか、議論していきたい。

【委員】

今の回答に関連するが、現時点ではターゲットینگに関しては特に明確な想定はないという理解でよいか。

【事務局】

事務局内では一定議論を進めている状況である。

特に若者の定住・定着や市外への流出抑制に関しては、若者自身の意見をしっかりと聞いた上で総合計画に反映させることがベストであると考えており、様々なチャネルを活用して意見を伺いながら計画を練り上げる予定である。現時点でという確定的な方針を打ち出しているわけではないため、今後の審議会の中で委員の意見をいただきながら構築していきたい。

【委員】

意見収集チャネルについて、「対話形式」「審議形式」「広聴形式」の3つが挙げられているが、具体的にどのような内容なのか詳しく説明を求めたい。

【事務局】

各形式について、順に説明する。

まず「対話形式」について、1つ目である「車座集会（市民）」は、市長自身が参加しながら、特定のテーマに応じて開催するものである。

2つ目の「若者」については、資料下部に記載のある「SASEBO⁵X（サセボクロス）」「Sasebo Change（サセボチェンジ）」等の活用を検討している。これは本市において実際に活動している、若者活躍にかかるプラットフォーム・高校横断型のコミュニティである。これらの既存のプラットフォームやコミュニティに参加している若者から意見を収集することを予定している。

次に「審議形式」の市議会と総合計画審議会については、各機関にてご議論いただくことを予定している。

「広聴形式」の「パブリックコメント」については、計画の素案等が定まった段階で市民に広く公表し、意見を求めるものである。

最後に、「ブロードリスティング（市民）」は、SNSやWebアンケート等を通じ、膨大かつ多様な意見を収集し、AI等の技術を活用して分析・可視化を行う手法である。具体的には、毎年5月下旬から6月下旬にかけて実施している「Well-Being指標アンケート」等を活用し、本市独自の記述式設問を設定して意見の収集・分析を行う予定としている。以上である。

【委員】

内容に入る前に2点伺いたい。

今回の審議会全体のスケジュールを教えてください。また、全体の計画策定にかかるロードマップにおける本日の会議の位置付けとして、本日我々委員がそもそも何を話し合えばいいのか、その点を説明してほしい。

【事務局】

今後のスケジュールについては、資料内に記載の通りである。基本構想の骨子や基本構想・計画の素案（第1版・第2版）の策定状況に応じて、その都度ご審議いただく流れを想定している。

また、本日の会議の趣旨については、まずは本市における課題感や認識の共有を図ることが主な目的である。さらに、当審議会では基本構想について審議いただくことになるため、事務局が考えている「計画策定にかかる前提となる考え方」を今回共有させていただいた。

【委員】

次回以降、チーム（部会）に分かれて話し合いを行う前提として、本日はどのような視点を持って臨めばよいのか、伺いたい。

【事務局】

まず、今後の議論の進め方として、「全体の議論」と「個別の議論」を想定している。

基本構想のうち、「市政の理念」や「将来像」等については全体での議論が適切であると考えており、7月～8月頃の開催を予定している次回の会議においては、この部分についてご議論いただきたい。

一方、各分野における「目指す都市像」などの検討については、専門部会や少人数のグループワークなどの「個別の議論」を進めることを検討しており、こちらはそれ以降必要に応じて開催することを想定している。

【委員】

これからの時代、佐世保市における最大の課題は「人口減少社会にどう対応していくか」と改めて実感した。資料にもその旨の記載があり、今後議論を深めていくことになると思うが、現行の「第7次総合計画」の策定時において、すでにこのような人口減少社会を踏まえた視点は盛り込まれていたのか、確認のため教えてください。

【事務局】

委員ご指摘のとおり、第7次総合計画を策定する段階においても、人口減少社会に対応していくという考え方は盛り込まれている。

【委員】

佐世保市の転出超過が全国ワースト1位になったことは、全国的なニュースになっている。人口の流出・流入は全国の自治体で足し合わせればプラスマイナスゼロになるという前提の中、今回の結果は「足による投票」とも言われ、住みたい場所の選択であると言える。以前、佐世保市はワースト10位前後であり、長崎市・京都市等が上位を争っていたが、他都市の状況が改善した結果、気がつけば佐世保市がワースト1位、すなわち「選ばれないまち」になってしまった。これは非常に大きな変化である。

これは「人口減少」ではなく、生きている人が出ていく「人口流出」であり、入ってくる人が少ないということである。そして、先ほどの議論の中で「若者」というキーワードもあったが、若者が流出している現状である。特に大学進学等のタイミングで、ほとんどが市外・県外に出ていってしまっている。これは大変深刻な状況であり、「佐世保は若者が出ていくまち」と見られている現状をどう挽回するかを考えなければならない。

市として、この流出の背景にある「課題」をどのように分析し、捉えているのか伺いたい。

【事務局】

会長からのご指摘のとおり、佐世保市における転出超過が全国ワースト1位になった事実は真摯に受け止めるべきであり、特に若い世代の転出超過は数年前から続いている現状である。人口移動には進学、就職、転勤などの複合的な要因が絡み合っているが、「減少ではなく流出である」という位置付けを真摯に受け止め、今後対策を講じる上でしっかりとした分析を行っていく。

若い世代が定着しなければ、将来的な子どもの数や労働人口の減少に直結し、地域の活力が衰退していく。現状では、若者に選ばれるまちへと変わるためには、働く場所の確保や、賃金をはじめとする労働条件の向上が不可欠であるという認識を持っている。この分析については、専門家の意見なども聞きながら整理を進め、次回の審議会などの場において委員の皆様にお示ししたいと考えている。

【委員】

若者が市外に出る動機として考えられるものに、「東京等の都市部の生活を

肌感覚で体験したい」「これまでの人間関係をリセットして違う場所で人生を再出発したい」が考えられ、これらの自然な思いは対策を考えても仕方のないことだと思う。また、若者のやる気や挑戦の現れであり、市としてはむしろ後押しすることが適切ではないだろうか。

しかし、人口流出問題の本質として考えなければならないのは、「佐世保には何もない、西の果てのまちだ」と市民が思い込む点である。もし市内に住む若者が、地元のことをより理解していれば、市内に住み続けるというような別の発想もあるのではないか。

例えば、市民文化ホールのように、戦時中の本市の功績を称える歴史的な背景の中で建てられた場所であるといった「佐世保の誇り」を、中学校や高校の教育の中でしっかりと教えていけば、若者の意識も少し違うのではないか。

若者が流出することを無理に引き留めるよりも、まずは「佐世保はこれだけ誇れるまちである」という事実について教育を通じて若者へ伝えたいと、それでも市外に出たいという思いある若者については送り出してあげる、そのようなアプローチの方が適切ではないだろうか。

【委員】

人口流出の件については、市として、転出が多い原因や就職の受け皿の弱さ、構造のミスマッチ、賃金格差、市内企業の認知度不足など、一定の分析がなされている。ここまで分析が進んでいるとすれば、これらを踏まえた具体的な改革や今後の手立てについて、方向性があれば教えていただきたい。

【事務局】

市としての具体的な取組の一例として、長崎国際大学の情報系学部新設への支援があり、佐世保商工会議所や工業会とも連携した学生の市内就職への流れを作るといふ取組を検討している。

全国的な転出超過の傾向がある中、近年の本市の転出超過数としては約1,500～1,800人程度を推移しているが、今年度の数値が突発的に高くなったわけではない。以前は約3,000人程度の転出超過数があった他都市等の数値が下がっているために、今回本市が全国1位となったという側面もある。

進学・就職、就職の際の受け皿が薄いことなどが要因の一部であることは容易に想像できるが、他にも他市町への引越などを伴う海上自衛隊員も多い本市ならではの要因等も考えられるため、今後より分析をしていきたい。

また、委員ご指摘の、教育を通じて若者のシビックプライドを高めていく施策も必要であると考えている。個別の「このような取組があったらよい」とい

った意見も踏まえつつ、今後8年間のまちの理念・将来像等について委員の皆様と共有し、ご議論いただきたい。

【委員】

本市が転出超過ワースト1位になったという事実は、個人的には意識改革のための「非常に良い機会」であると捉えている。この報道を機に、まちを歩いていても市民の意識が高まっていると感じるほか、SNS上でも「このままでは良くない」「真剣に佐世保の未来を考えなければならない」といった本音の意見や辛辣ながらも熱いコメントが数多く寄せられている。

ワースト1位という危機的な状況になったからこそ、これまでモヤモヤとした思いを抱えながらも発言する場所がなかった市民が、良い面も悪い面も含めて意見を言える機運が生まれている。

日頃から若い世代と接する機会が多いが、彼らの声やアンケート結果を見ると、確かに「佐世保には何もない」という不満を持つ若者は多い。しかし、一方で「佐世保は好きですか」と質問すると、多くの若者が「好きだ」と答える。これは非常にプラスな要素であり、彼らが言う「何もない」の中身を詳細に分析する必要がある。

「何もない」が指す内容は人によって全く異なる。例えば、本が好きな人にとっては「本屋が次々と潰れていくこと」であり、音楽好きにとっては「好きなロックバンドが来てくれるようなライブハウスがないこと」が「何もない」に該当する。これが人によっては「やりたいファッション系の仕事がない」ことであり、子育て世代であれば友人が話していた「無痛分娩に対する補助などの医療サポートがない」といったように、それぞれの立場やライフステージによって不満の本質は違う。ここを解き明かさなければ、ただ「何もない」と言い続けるだけで、本当の問題が見えてこない。

それから、このまちで暮らす大人たちが「楽しい」「面白い」と語っていないければ、子どもたちは外へ出ていってしまうのではないか。「大人がキラキラしていないまち」に若者は残らない。例えば、近隣の波佐見町では、20代から30代の若い世代が町を面白くしようとキラキラと活動している姿を見て、町外に出ていった人や縁のなかった人たちが「あの町なら面白いことができそうだ」と集まってきている。

課題を真剣に考える議論も大切だが、「佐世保でこんなことをやったら面白い」というポジティブな意見を発出していくべきである。面白いまちには面白い人が集まり、さらにまちが面白くなっていく。この総合計画審議会で今後のビジョンを策定する上でも、市民みんなが「自分たちのまちは楽しい、面白

い」と思えるようなまちを目指していくことが、方向性として極めて重要である。

本市でも実は面白い取組や活動がたくさん行われていると感じている。これらが市民にあまり知られていないのは非常にもったいないと感じる。観光やグルメといったコンテンツの魅力の発信はもちろん重要だが、もっと「人」に注目し、人に焦点を当ててまちづくりを考えていくべきである。

また、先ほどの長崎国際大学への学部設置支援について、前向きな課題提起として意見を申し上げる。

現在の国際大には、すでに薬学部があり薬剤師を育成しているものの、本市では薬剤師が不足しているという現状がある。地元企業が大学へ赴いてアピールしても、学生たちは卒業後、薬剤師が飽和しているとされる東京や福岡などの大都市圏へ行ってしまい、佐世保に残って働いてくれないという現状がある。

自身はITが好きであるため、情報系の学部ができること自体は大変嬉しく、期待もしている。しかし、既存の薬学部において「人材は育つが地元に着しない」という課題の原因をうまく分析・改善できないままIT（情報）系の学部を作ったとしても、本当にその若者たちが佐世保に残ってくれるのかという懸念がある。

これを打破するためには、もっと早い段階から本市全体で思い切ったネット環境の構築を進めるべきである。以前、奈良県を訪れた際に観光地も含めてWi-Fiが広く整備されているのを目にしたが、例えば「佐世保のまちはどこでも完全にWi-Fiが通る」「公園でもどこでもパソコンを持って仕事ができる」といった、ITに振り切った先進的なまちづくりの雰囲気や環境を構築していれば、ITを学びに来た学生も「このまちは楽しい、ここで働きたい」と感じるはずである。新学部を作るのであれば、そうした受け皿となる環境整備をセットで進めることが大事であると考えている。

【委員】

行政の各部局においては、それぞれ市民から様々な課題や「こういうことをやりたい」という要望を聞いていると思う。しかし、市民や企業が新たな取組を行おうとした際、行政の縦割りや条例・規制が障壁となり、やりたくてもやれないという現状が垣間見える。

専門部会や今後の議論を進めるにあたり、事務局は行政内部の各部局の意見を積極的に吸い上げ、「これを実現するためにはどうすればよいか」という解決策の基礎となる部分を提示すべきであり、現状の進め方ではその視点が欠け

ているのではないかと懸念している。

具体例を挙げると、農業振興地域や市街化調整区域といった「土地利用に関する規制」が挙げられる。本市からの人口流出が問題視されているが、近隣の川棚町や佐々町等はそこまでの減少率になっておらず、そこから佐世保市へ働きに来ている人も多い。これは税金の安さといった基本要因に加え、土地利用のしやすさも影響している。佐世保市で何かをやろうとしても「各種規制によってできない」という状態を解決しなければ、根本的な対策にはならない。もちろん個別案件ばかりを議論していても進まないため、例えば「この農地は維持するが、ここの部分は思い切って規制を撤廃し開発を進める」といった明確な棲み分けを行うなど、大胆な見直しを行うべき時期が来ている。

行政に携わる事務局や職員の皆様においては、単なる前例踏襲ではない大胆な将来ビジョンを描いていただきたい。そうしなければ、新しい産業も生まれず、安定したまちの土台もできていかない。そのためには、まずは行政側が部局横断での議論を精力的に行い、目指すべき方向性を示してほしい。

【事務局】

「部局横断の会議」や「行政の縦割り」という課題については、以前から多くの意見をいただいているところである。これらに対しては現在、行政内部である工夫を凝らし、それぞれの部局が抱える課題感を全庁的に共有していこうという動きをまさに開始したところであり、実現に向けて進み始めている。

また、具体例として挙げられた土地利用規制等の問題については、まさに一部局だけで解決できるものではない。近隣市町との比較において「佐世保市と何が違うのか」、あるいは「佐世保市がその規制を撤廃・緩和した場合にどのような影響や効果が生じるのか」という点については、実は行政内部でも検討を始めたところである。一朝一夕に解決できる容易な話ではないが、指摘のあった視点は今後の市政運営において極めて重要な視点であると認識している。

本日いただいた意見は、しっかりと庁内で共有を図るとともに、次期計画の策定プロセスにおいても部局横断での議論を徹底していきたい。

【会長】

自身が会長を務める「佐世保市行財政改革推進会議」の視点から申し上げると、佐世保市役所では現在、非常に興味深い組織改革の取組が紹介されている。

例えば、勤務時間の20%を本職とは異なる別の業務に充て、それを約1年間継続できる「させぼ20%ルール」という取組を導入しており、職員が他部局の課題に触れる機会を設けている。また、先般も市長とともに職員による研

究発表会に立ち会ったが、これは職員が自発的に部局横断の勉強会グループを組織し、それぞれの研究成果を提言として発表する試みもある。このように、行政の現場でも縦割りを打破するための面白いアプローチは着実に始まっている。

ただし、委員の指摘のとおり、行政職員はどうしても自身の担当業務を最優先に考えてしまうため、結果として視野が狭くなりがちである。組織として縦割りを打破する仕組みを用意していても、個々の職員がかなり強く意識していなければ、容易に「視野狭窄」に陥ってしまうという点については、今後の計画策定や市政運営において十分に留意すべきである。

【委員】

行政の面白い取組という点に関連して補足すると、佐世保市役所には「若者活躍・未来づくり課」という部署が新設されており、若者に特化した取組を2年ほど前から既に開始している。このような専門の課が市役所の組織内に存在していることは、全国的に見ても非常にユニークで興味深い試みであると受け止めている。

さらに、直近の具体的な動きとして、昨日オープニングセレモニーが行われた「NKS SASEBO CONNECT BASE（西九州させぼコネクトベース）」がある。これは、学生を含めた若い世代の「交流活動拠点」として、市が明確な目的を持って整備した場所である。

審議会の委員におかれても、いつでも気軽に足を運べる場所となっているため、ぜひ実際に訪れて若者たちとの交流を図っていただきたい。若者の側にとっても、この審議会にいるような地域の大人たちと触れ合い、その存在を知ることが非常に有意義であるだろう。

【委員】

若者に関する取組の経緯として、自身も令和3年度に「SASEBO未来デザイン会議」という会議において、15歳から39歳までの若者58名とともに議論を重ねた経験がある。全18回、計200時間ほどに及び、若者政策について深く考えてきた。

その当時の議論や、先ほど委員から指摘のあった部局横断の考え方が、ようやく現在の「若者活躍・未来づくり課」の設置や「NKS SASEBO CONNECT BASE（西九州させぼコネクトベース）」といった交流拠点の設置という成果に繋がってきたのだと感慨深く受け止めている。

しかし、若者の声をただ聴くだけではなく、それらの意見を実際の政策として結実させるためには、行政における資源配分を大胆に変えなければならな

い。これまでと同じ前例踏襲の施策を継続しては、本市がさらに衰退していくことは明白である。

そういう意味において、今後は過去の延長線上にある既存の事業を思い切って廃止し、真に必要な施策へと予算や資源を集中させる「スクラップ・アンド・ビルド」を進めていくべきであると考えている。

【委員】

ここまでの議論を総括すると、事務局から提示された「共創」「共生」といった基本理念（案）からは、従来の計画を踏襲したこれまで通りの姿勢は伝わってくるものの、まちをどのように変革していくのかという強いメッセージが伝わりにくい。前例踏襲の殻を破って基本理念そのものを一層大胆に変えていくことも選択肢として大いにあると考えている。

【委員】

前例を踏襲して次の計画を策定するという手法は、行政側は得意であるかもしれないが、現在はもうそのような時代ではない。

むしろ、本市が転出超過ワースト1位になったという「良くないニュース」を、まちを大きく変えるための「良いニュース（好機）」へ転換する機会と捉え、前例にとらわれることなく、一層大胆に変えていくという姿勢が求められる。

【委員】

これまでの若者流出防止・活躍支援という議論を否定するつもりはないが、そもそも「佐世保で生まれた子どもたちが、将来このまちに帰ってきたいと思えるか」「このまちで幸せな子ども時代を過ごせているか」という視点は極めて重要である。

現在、全国的に子どもの自殺や不登校が増加傾向にある中、佐世保に生きる子どもたちが今まさに幸せであるのかという問いは、理念の検討のうえで考えていただきたい。こうした「子どもの幸せ」という視点も、ぜひ次期計画の中で検討いただきたい。

【委員】

委員ご指摘のとおり、「子どもの幸せ」も非常に重要な視点である。

【委員】

人口減少は本市にとって極めて重大な課題であり、現行の第7次総合計画も

その視点で策定されたはずであるが、現状はさらに厳しい。次期総合計画の全体体系（基本理念・基本目標・政策・施策）の立て付けにおいて、各部局が個別に事業を書き込むだけでなく、すべての施策の中に「人口減少社会を踏まえてどう対応していくか」という視点を明確に書き込んでおく必要がある。

今後特に重要となる点は以下の2点である。

1点目は、人口減少に伴い市の職員数や財源が縮小する中で、いかにして必要な行政サービスを維持していくかという点である。行政側においてA IやD Xを活用した業務効率化を進めることは当然であるが、それと同時に、市民や企業、各種団体側もそうした変化に対応し、協力していかなければならないという点も合わせて計画の中に位置づけるべきである。

2点目は、福祉や防災といった分野における地域コミュニティの維持である。今後、これまでと同等のサービスを維持するためには、民生委員、町内会、消防団といった地域住民の協力が不可欠になる。地域を支えるこれらの方々の活動を支えるためにも、行政はD XやA Iの環境整備を行うべきであり、同時に、こうした「実際に佐世保市を支えている人」にスポットを当てて広くアピールしていく必要がある。若い世代も含め、地域の活動がまちを支えるやりがいにつながるような見せ方を、計画のどこかに書き込んでいただきたい。

いずれにせよ、8年先、さらには10年、20年先を見据えた大きな時代のうねりの中にある計画である。この計画を実際に実行していくのは市役所の若い職員たちであるため、彼らがやる気と責任、そして希望や期待を持って取り組んでいけるような計画を策定できるよう、審議会委員として注力していきたい。

【会長】

「人口流出・減少」というテーマを大前提として捉え、地域住民や民間との連携を深めること、そしてまちを支えるプレイヤーに焦点を当てるというシビックプライドの視点を盛り込んでいくことが重要である。

定刻となったため、本日の議論はここまでとする。

事務局においては、本日出された貴重な意見を整理し、今後の計画の組立てにしっかりと反映させていただきたい。

【事務局】

委員の皆様、本日は非常に貴重なご意見をいただき、感謝する。頂いたご意見については、庁内で共有を図ったうえ、今後の計画策定に活用していく。

今年度の審議会開催については、年3～4回程度を見込んでおり、次回会議の開催時期は7～8月頃を見込んでいる。委員の皆様にはご負担をおかけするが、引き続きご出席を賜りたい。

6. 閉会

以上